

平成 28 年度第 4 回文系チャレンジ講座を実施しました

平成 28 年度第 4 回文系チャレンジ講座が、平成 28 年 9 月 14 日、「アートと環境」をテーマに大分大学教育学部の田中修二先生によって行われました。

遠隔配信された大分雄城台・大分鶴崎・大分商業・日田・別府翔青・臼杵・中津南・国東・高田・大分西の 10 校(213 名)と来学受講の由布・玖珠美山の 2 校(40 名)、合わせて 253 名の高校 2 年生が受講しました。

田中先生は、講座の前に受講生に「地球温暖化や大気汚染、公害といった自然環境に関わる問題、過疎化や少子高齢化などの社会環境における課題は、いずれも今日の私たちがつねに考えていかなければならない大切なテーマです。アートの世界でもそれらは重要な関心事の一つであり、様々な取り組みが行なわれています。この授業では、人びとが「環境」という問題を意識するようになった歴史を振り返りつつ、そこにアートがどのように関わるかを紹介します。環境に関心のある人、アートに興味のある人、どちらもが新しい視点からそれらについて考える機会になればと思います。」と、語りかけました。田中先生の専門分野は近代日本美術史で、大分大学で研究や教育に関わる一方、屋外彫刻の歴史の研究や現存する作品の保存活動をされています。

講座では、美術＝実技という高校での美術の授業の先入観を持つ受講生にとって、講座の流れが「アートの環境」「環境問題」「環境とアート」と示されアートと環境の関係を提示されたことに、少し驚きがあったようです。



環境を「めぐり囲む区域、四囲の外界」(広辞苑, 第 6 版)と考え、人間や生物を取り巻き、それと相互作用を及ぼし合うものとして見た外界であると、説明しました。遺跡からの発掘物、建築物・絵画・彫刻をスライドで変遷や当時の人々にどのように受け入れられてきたかなど説明を受ける中で、美術が持つ目的が自己表現の手段だけでなく、歴史・社会、そして環境と深く関わりながら自由な発想で変化していった過程を知ることができました。それは美術を作る側だけでなく、それを観賞する側の人の観賞眼や美術に対する価値の置き方にまで

変化があったということです。その中で「環境」は両者に変化を与える大きな要因の一つになり得るとして、公害・環境問題との関わりから「環境」の視点から美術との関わりを考えようと問いかけてきました。足尾鉍毒事件(1880 年代後半)をはじめ、その後の大気汚染や気候変動などが美術や建造物や景観に影響を与えている事実を知り、環境の中にある美術や建造物という意識を持つことが重要であることを学びました。このような状況の中で、いかにして建造物や屋外彫刻の保全をすればよいのか、私達ができる保全活動はないのか考えさせられました。実際に高校生と保全活動をしていることを知り、アートと環境の関係は身近なことであることに気づかされました。

美術と環境という見失いがちなりそんな関係を研究していくことは、地球環境の保全と深いつながりを持っているのです。受講生は、大きな発見をした講座でした。

講義後のアンケート調査では、「総合的に判断して良かった」(97%「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」の合計。以下同じ)、「教員は真剣に取り組んでいた」(99%)、「受講生は授業に意欲的に取り組んだ」(97%)という高い評価でした。遠隔配信については、「音声は良く聞こえた」(76%)、「映像はよく見えた」(96%)という結果がでました。

受講生の具体的な声として「アートと環境は繋がらないと思っていたが、美術館だけでなく、フィールドにもあることを知った」「アートと環境という繋がりに興味を持った」「鮮明な写真と他校生のようすは、新鮮であった」など多くの感想が寄せられました。

